

- ◆ 直近で実施したL452R変異株PCR及びゲノム解析結果の内訳では、L452R陰性及びオミクロン株の割合が80%以上
 - ・感染が急拡大しており、変異株スクリーニングのために新型コロナ陽性の全検体を確保することが困難になってきている。
 - ・ファーストタッチなどの陽性者対応に重点化した体制に移行する時期がきている。

◆ 大阪府の方針

○変異株スクリーニング検査体制

陽性検体の全数確保を中止し、阪大微研や大安研、医療機関などの変異株スクリーニング検査実施可能機関に搬入された検体を中心に実施

○ゲノム解析体制

変異株スクリーニングを実施した検体のうちCt値30未満のものを中心に実施

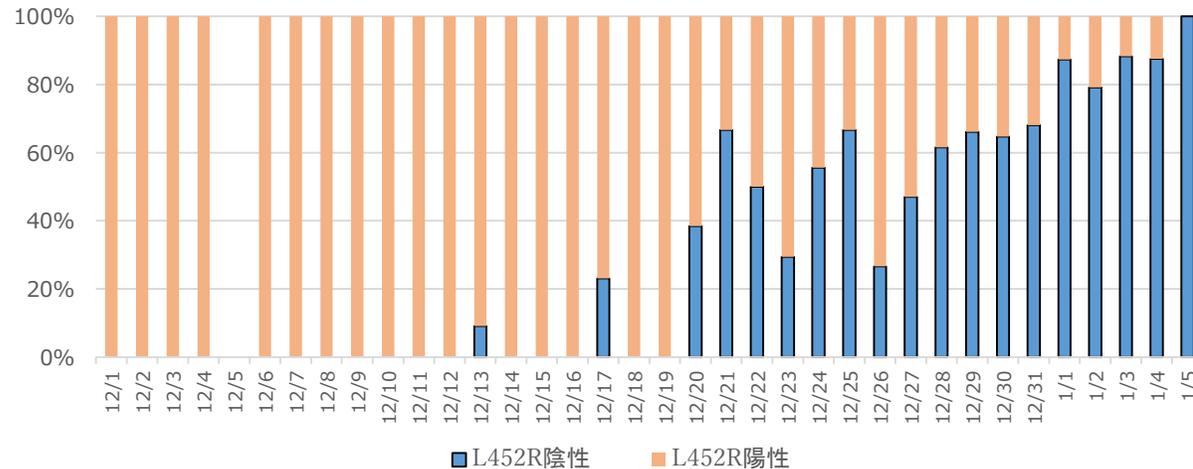
ただし、ゲノム確定例からの感染経路が明らかである場合（クラスターや家族内感染等）はゲノム解析の実施は不要

<変異株PCR検査実施状況（機械的な試算）（12/27-1/2 暫定値 1/5時点）>

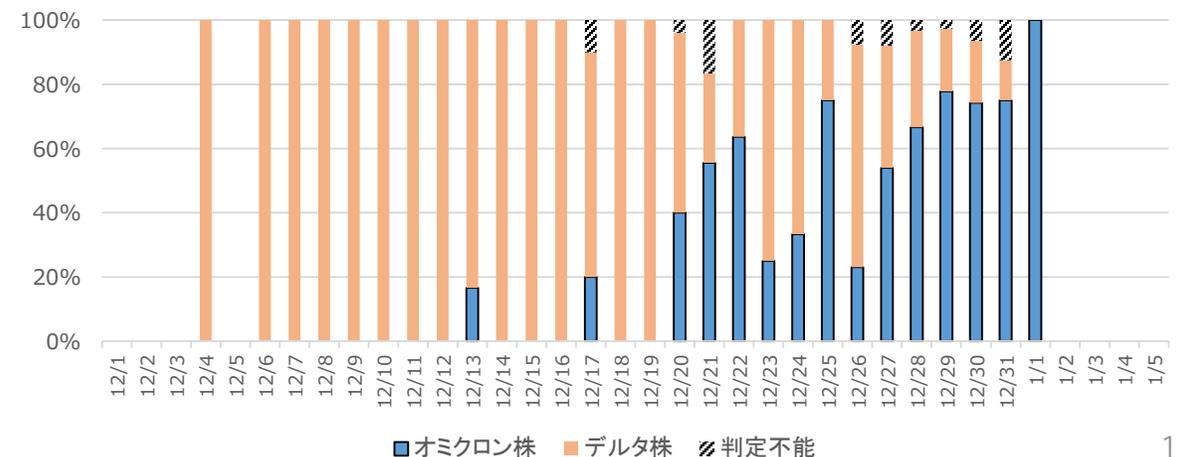
	全国	大阪府
変異株PCR検査陰性率	46%	60%

（出典）1月6日第66回アドバイザーボード資料4より抜粋

<L452R変異株PCR検査（検体採取日別）>



<ゲノム解析結果（検体採取日別）>

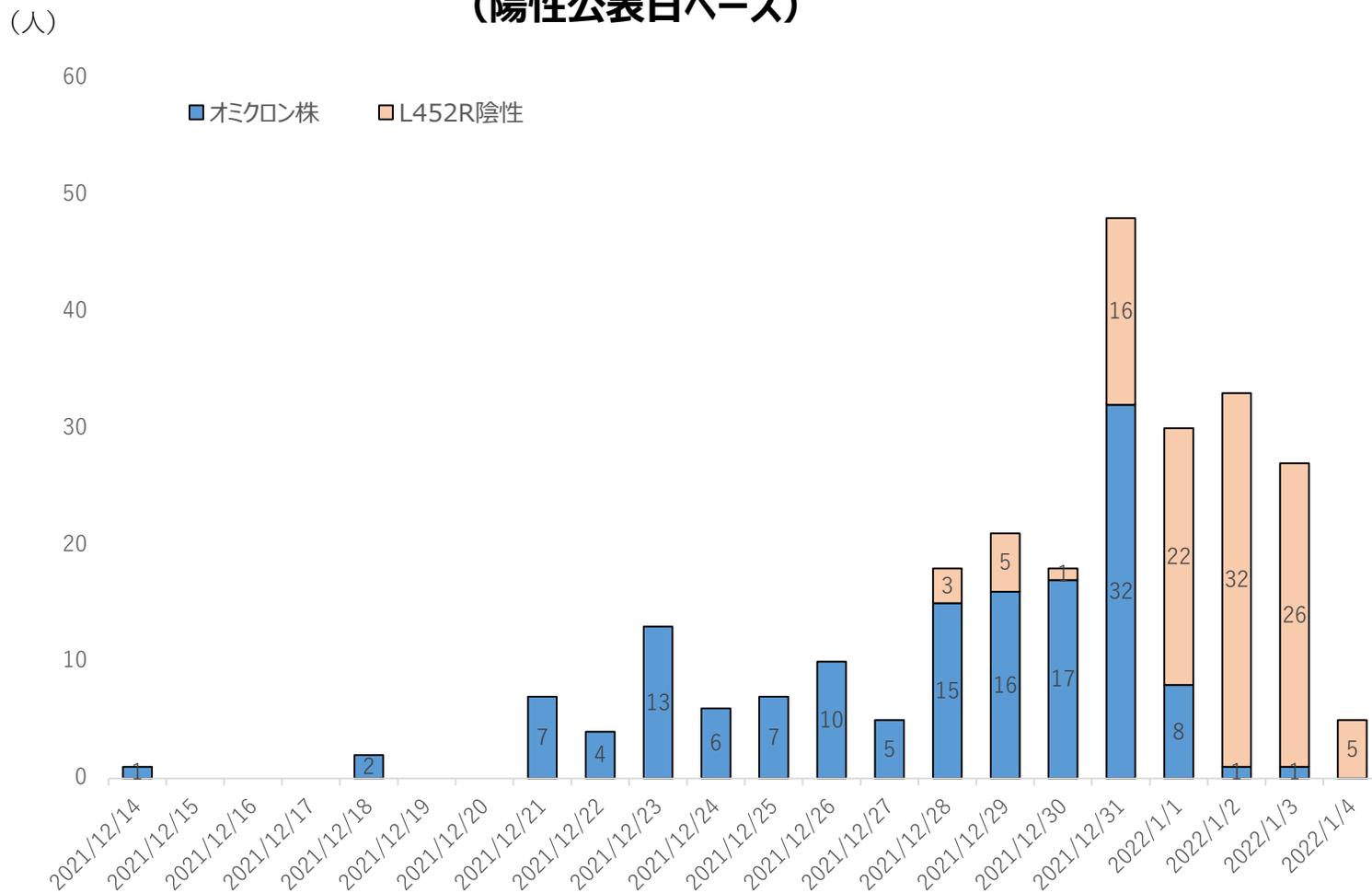


（注1）ゲノム解析はウイルス量の多い検体を対象に実施しているため、変異株スクリーニング後の全検体に対して実施しているわけではない。

オミクロン株陽性者の発生状況とワクチン接種状況（1月4日時点）

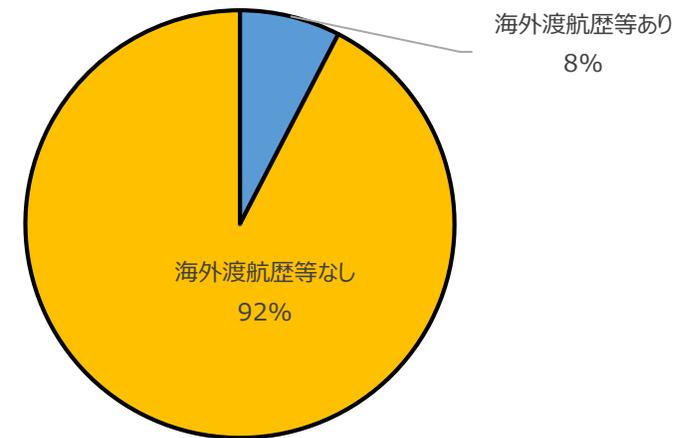
◆ オミクロン株陽性者のうち、海外渡航歴等なしが約9割。また、ワクチン2回接種済の陽性者が半数以上を占めている。

オミクロン株陽性者等の発生状況 （陽性公表日ベース）

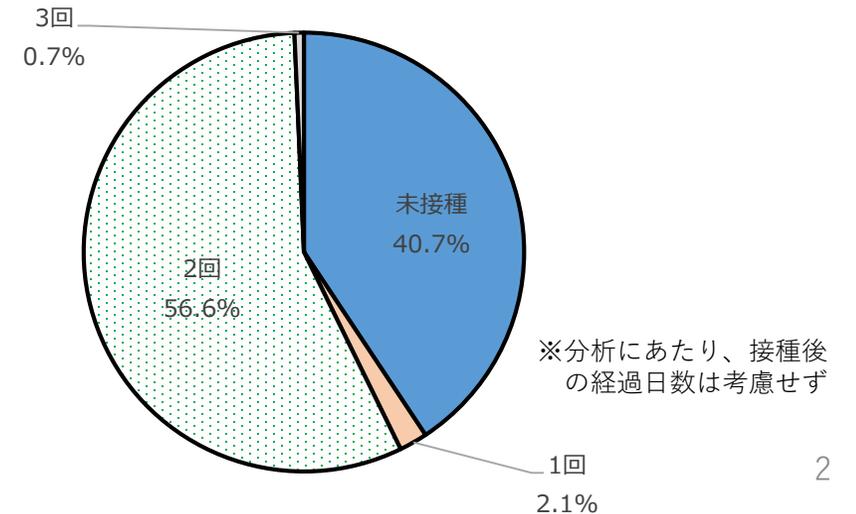


（注）ゲノム解析により今後、オミクロン株陽性者が増加する可能性あり

オミクロン株陽性者の海外渡航歴の有無 12/14から1/4 145名



オミクロン株陽性者のワクチン接種状況 12/14から1/4 145名



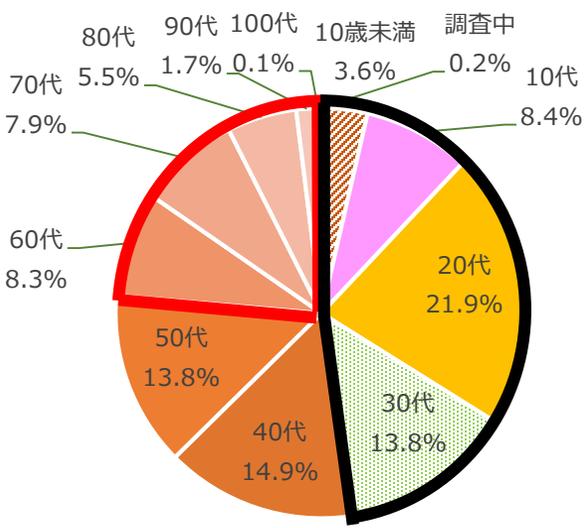
年代構成(1月4日時点)

◆ 第六波は、第五波と比べ、60代以上の陽性者の割合が増加。
また、オミクロン株陽性者については10代以下の割合が高い。

※12月17日以降を「第六波」と総称

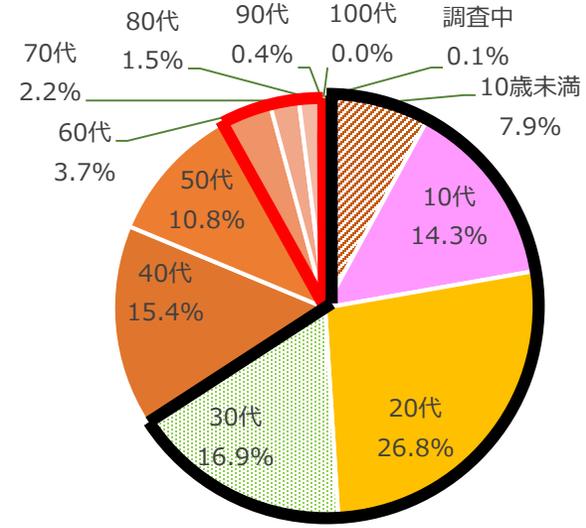
第四波(3.1-6.20)

55,318人



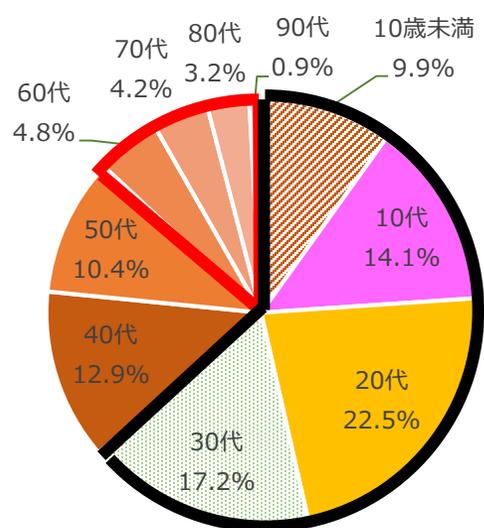
第五波(6.21-12.16)

100,891人



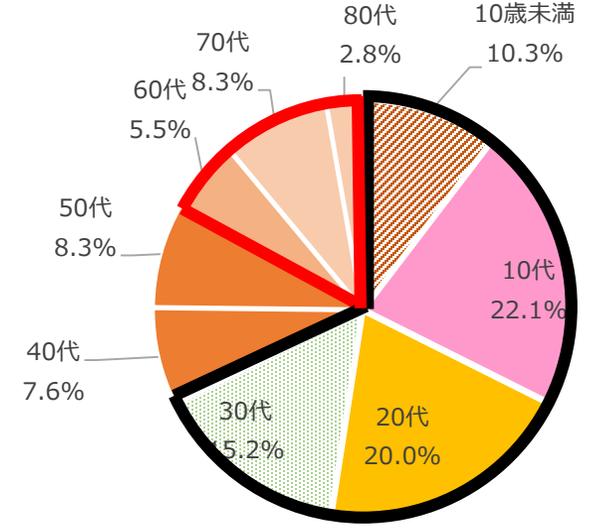
第六波(12.17-1.4)

790人



オミクロン株陽性者(12.14-1.4)

145人

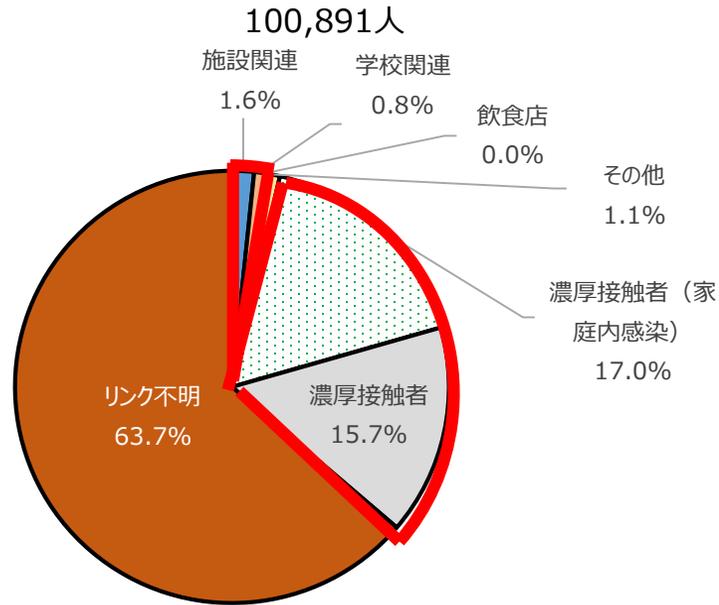


	第四波	第五波	第六波	(うち、オミクロン株)
30代以下の割合 (うち、10代以下の割合)	47.7% (12.0%)	65.9% (22.2%)	63.7% (23.9%)	67.6% (32.4%)
40・50代の割合	28.6%	26.2%	23.3%	15.9%
60代以上の割合	23.4%	7.8%	13.0%	16.6%

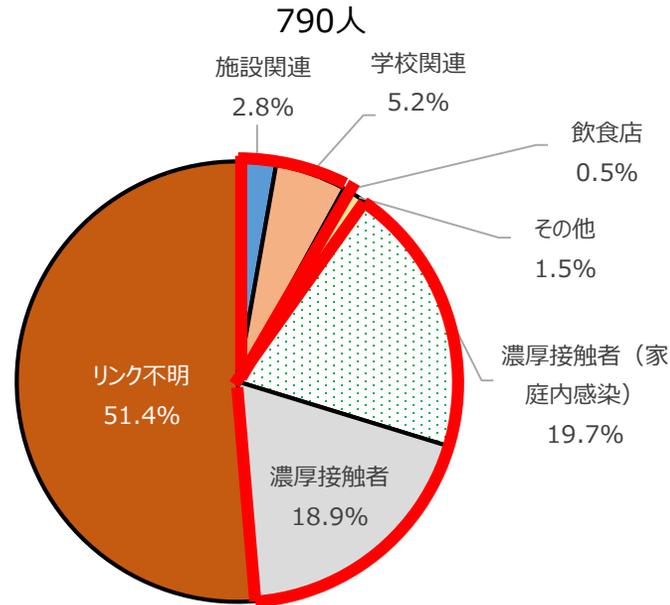
感染経路(1月4日時点)

◆ 現時点においては、オミクロン株陽性者の感染経路として学校関連や施設関連、濃厚接触者(家庭内感染含む)の割合が高い。今後、学校関連や施設関連での集団感染に注意が必要。

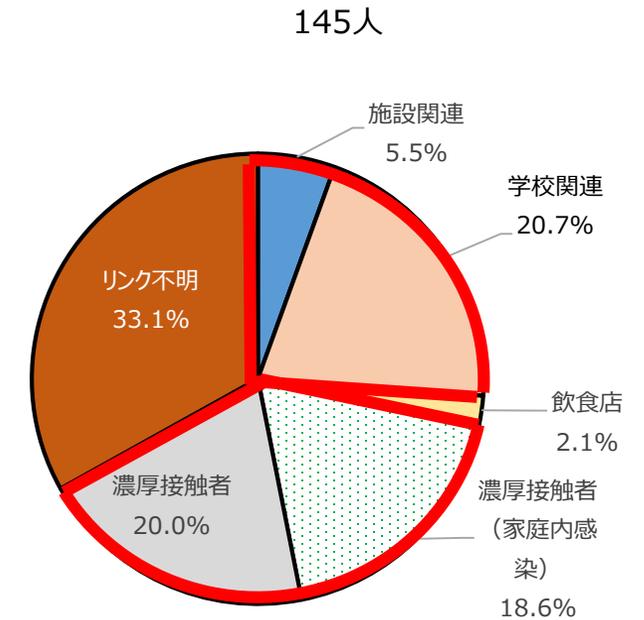
第五波(6.21-12.16)



第六波(12.17-1.4)



オミクロン株陽性者(12.14-1.4)

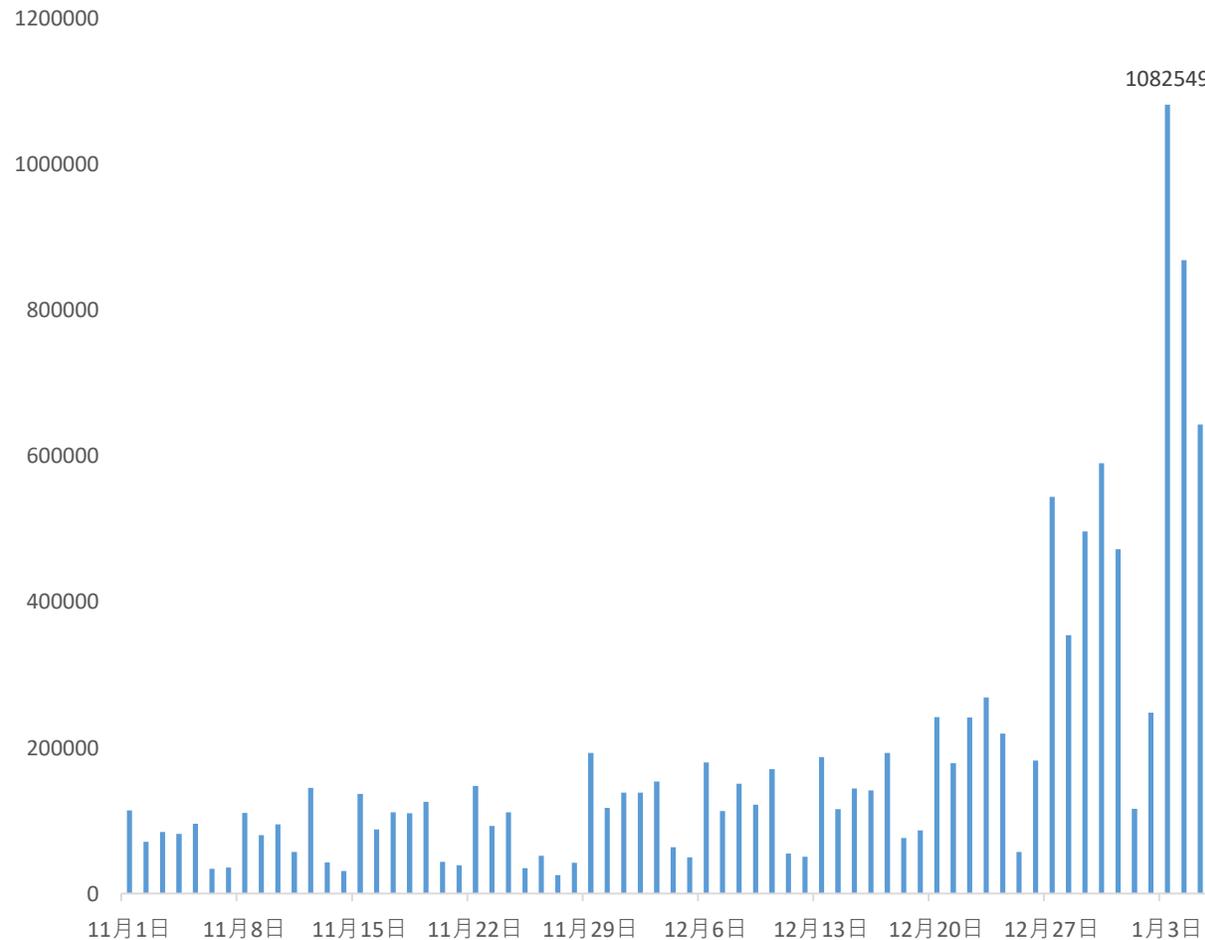


	第五波	第六波	(うち、オミクロン株)
施設関連	1.6%	2.8%	5.5%
学校関連	0.8%	5.2%	20.7%
飲食店	0.0%	0.5%	2.1%
その他	1.1%	1.5%	0.0%
濃厚接触者(家庭内感染含む)	32.7%	38.6%	38.6%
リンク不明	63.7%	51.4%	33.1%

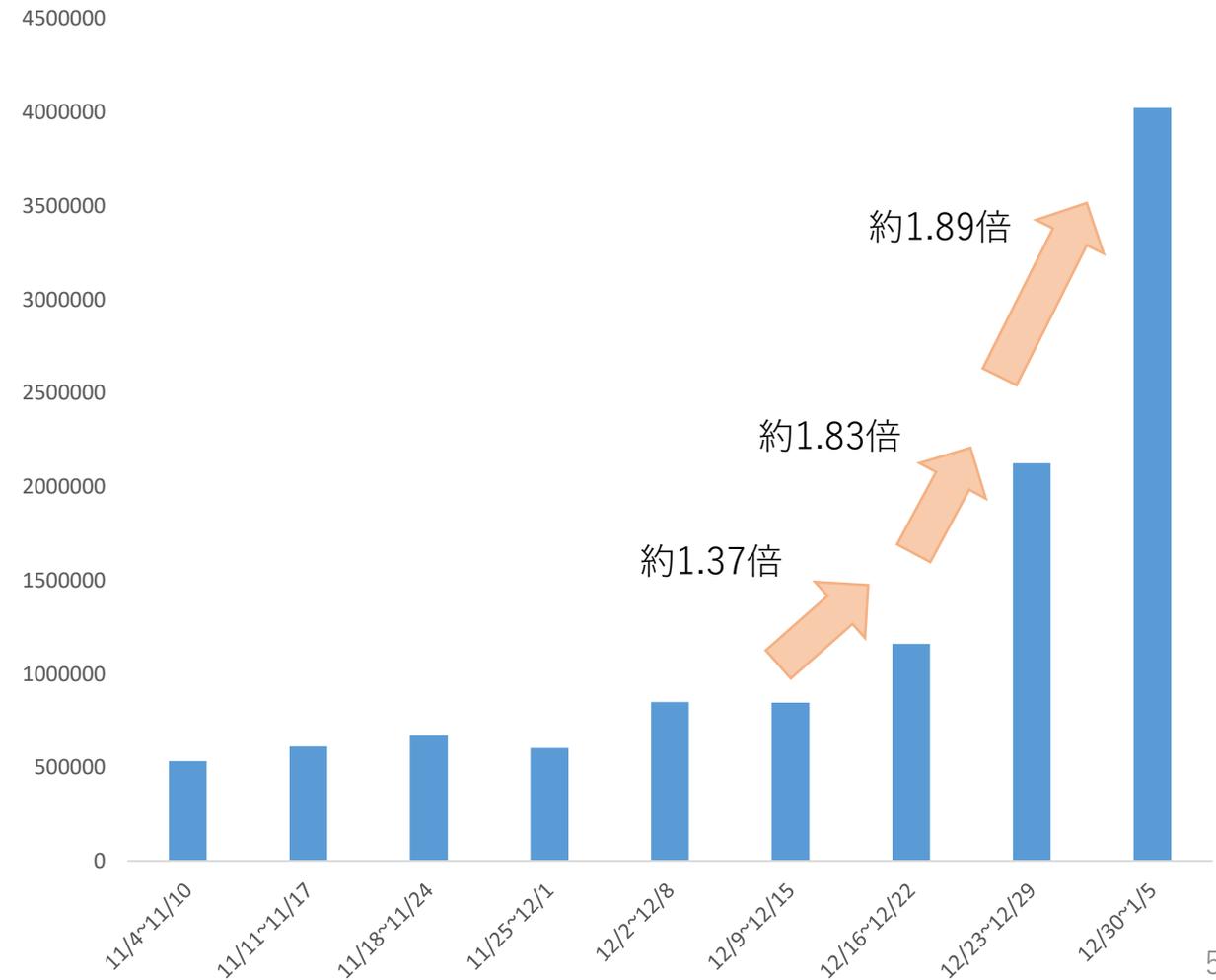
【参考】諸外国の新規感染者数（1月5日時点で分析）

- ◆ アメリカでは新規陽性者数が1月3日に過去最多の100万人超を記録。
令和3年12月26日～令和4年1月1日の1週間に確認された新規症例のうち、オミクロン型の比率は95.4%と前週77%から大幅に増加し、デルタ株からほぼ置き換わったとされる。（米疾病対策センター（CDC）公表）。

アメリカ（日次）



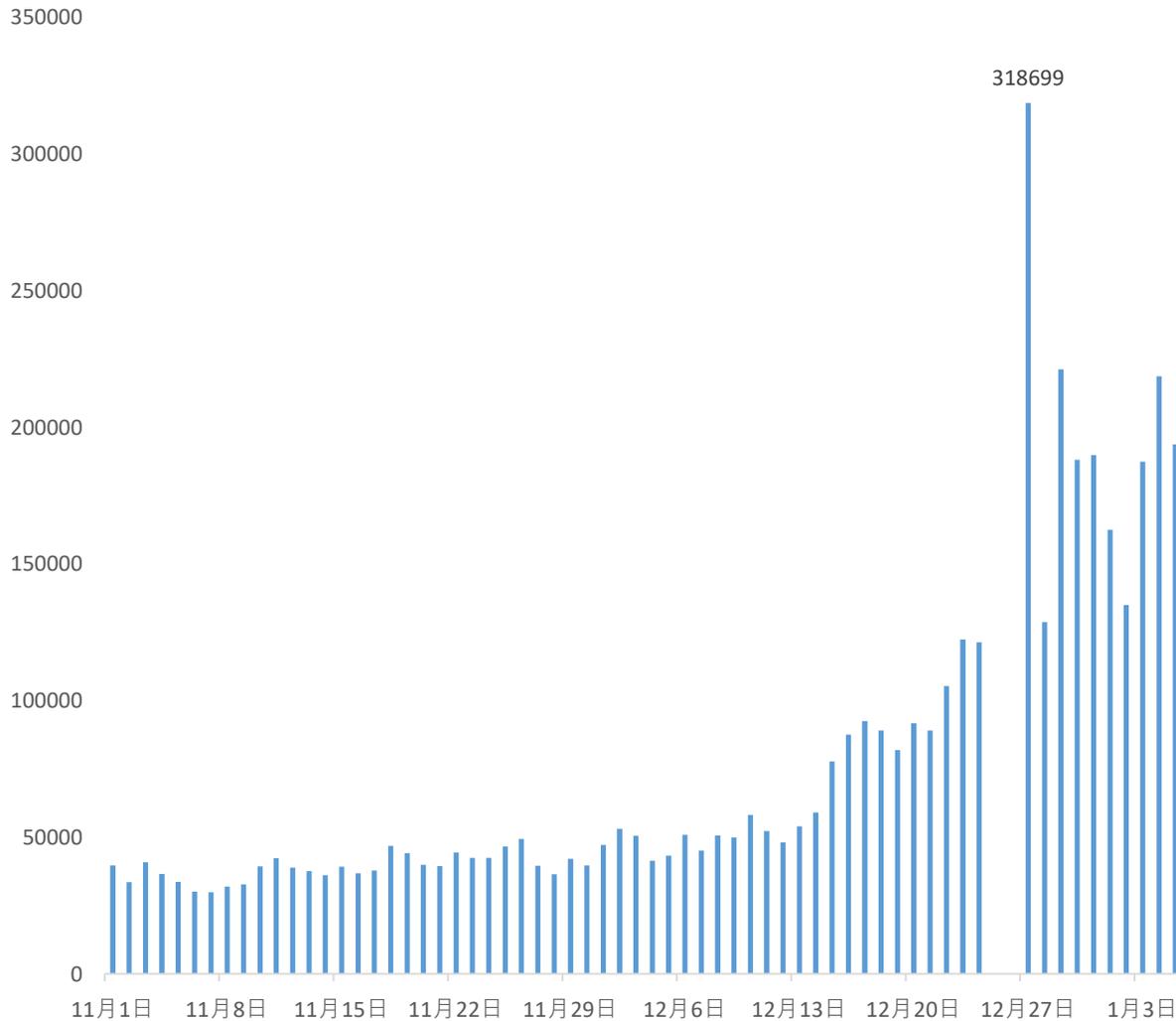
アメリカ（週次）



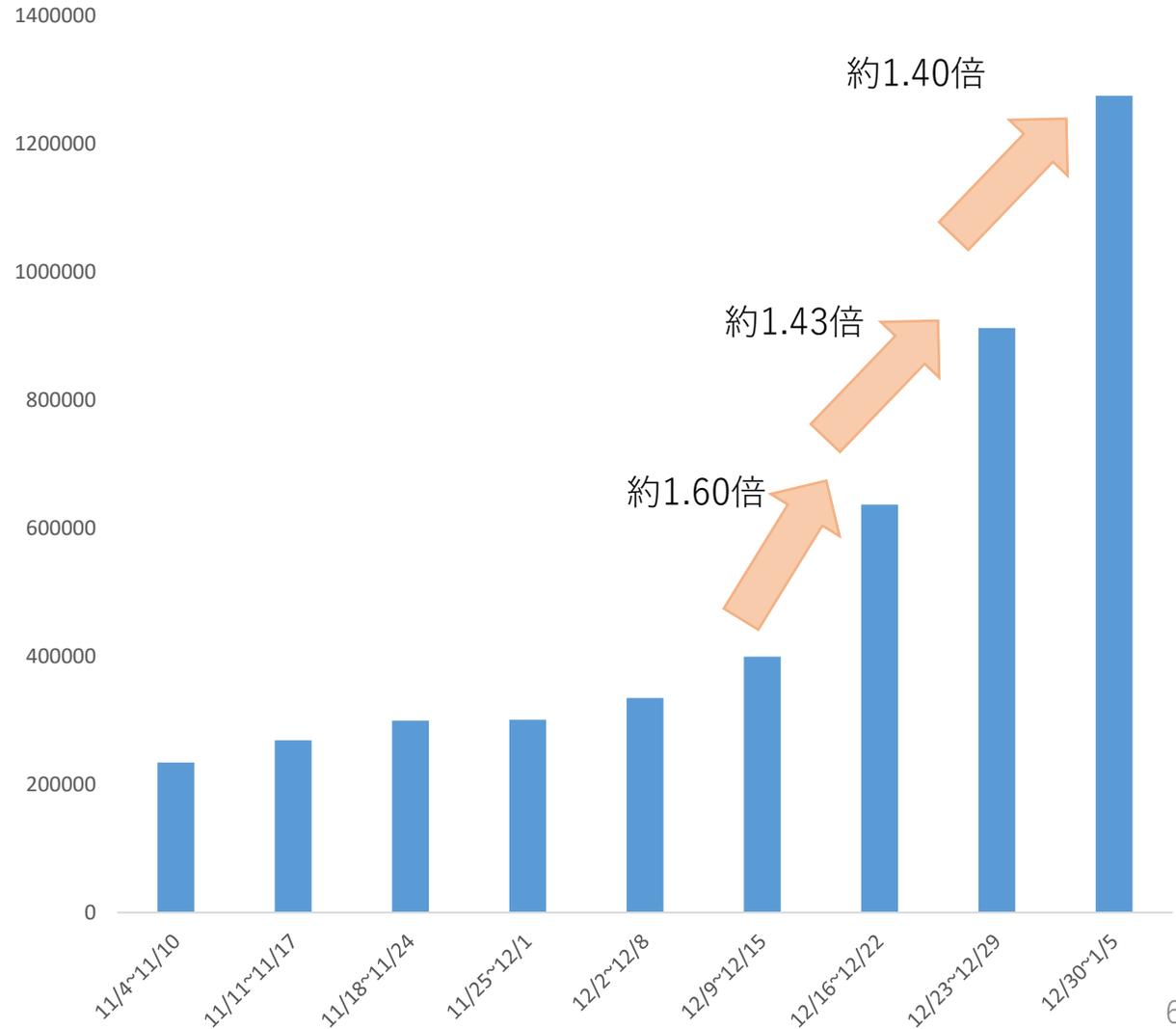
【参考】諸外国の新規感染者数（1月5日時点で分析）

◆ イギリスの新規陽性者数は高水準を継続。

イギリス（日次）



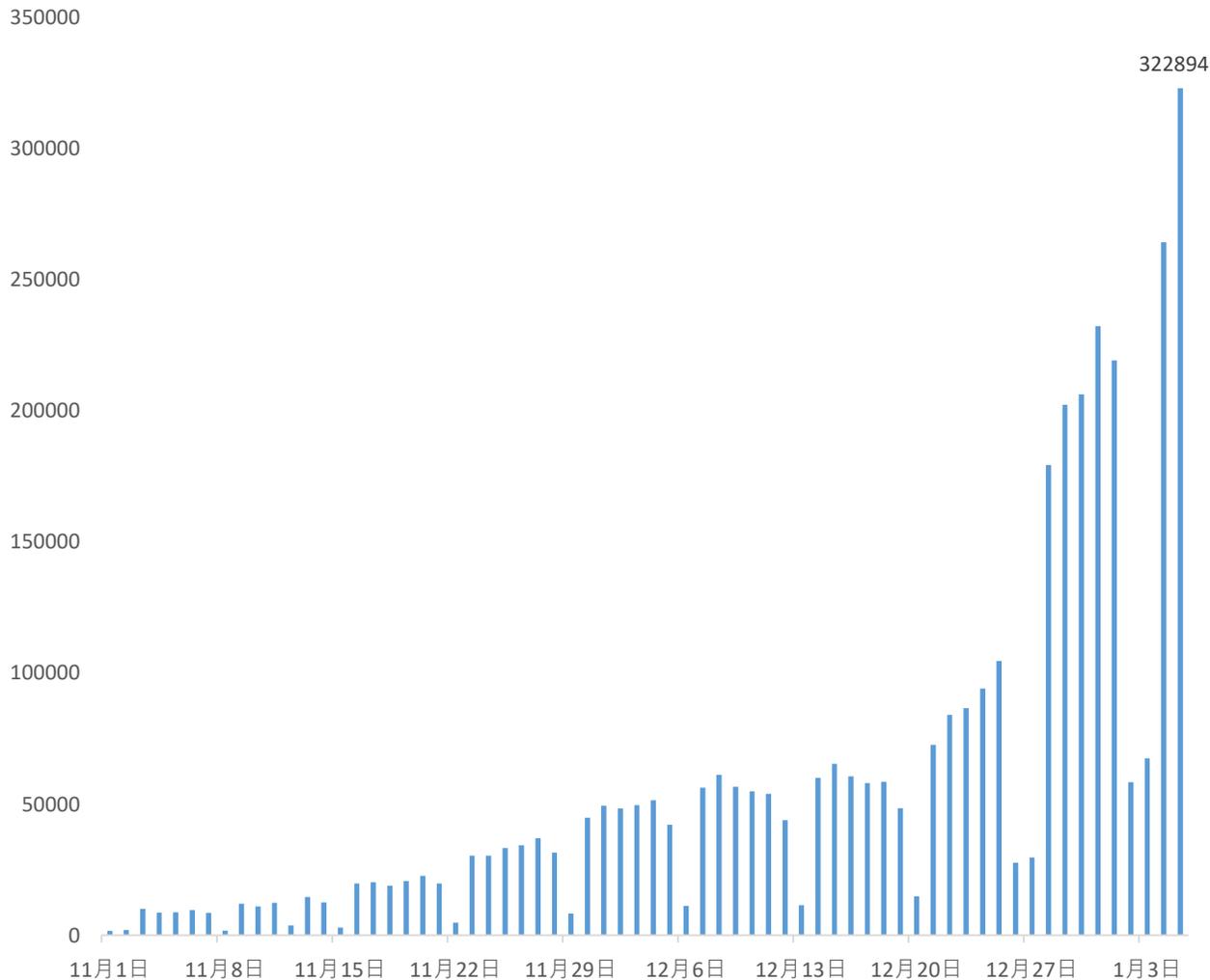
イギリス（週次）



【参考】諸外国の新規感染者数（1月5日時点で分析）

◆ フランスでは連日、新規陽性者が過去最多を記録。

フランス（日次）



フランス（週次）



オミクロン株について（各研究結果等）

公表主体	公表内容	各種報道内容や会議資料に基づく
WHO(12/7)	<ul style="list-style-type: none"> ・他の変異株に比べ増殖性に有利な可能性があるが、これが伝播性を高めているかどうかは不明。 ・オミクロン株に見られる変異は、抗体の中和活性を低下させる可能性があり、これが南アフリカ等での感染拡大の理由である可能性。 ・12月6日の時点で欧州連合の18カ国で確認された212例のうち重症度に関する情報が得られたものは全て無症状又は軽症(データ限定)。 	
WHO(12/18)	<ul style="list-style-type: none"> ・「オミクロン株はデルタ株よりも感染力が強いことを示す確かな証拠」として「市中感染が広がる地域では1日半から3日間で倍増」。 	
WHO (1/6)	<ul style="list-style-type: none"> ・「オミクロン株はデルタ株よりも重症化しにくいようだが、軽い感染症ではない」との見解を示す。 	
国立感染症研究所 (12/31)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 感染・伝播性 ・南アフリカにおけるオミクロン株の実効再生産数は2.55（95%信頼区間 2.26-2.86） ・英国におけるオミクロン株の倍加時間は2.4日（デルタ株に対する相対免疫逃避を考慮したモデル）。 ・オミクロン株感染例の家庭内二次感染率はデルタ株感染例と比較して、調整なしオッズ比で2.0倍（95%信頼区間 1.7-2.4）、（年代、性別、ワクチン接種歴等で調整したオッズ比で2.9倍（95%信頼区間2.4-3.5））。 ・家庭外の二次感染も含んだ二次感染率は1.96倍（95%信頼区間1.77-2.16）。 ・韓国のオミクロン株感染例25例の解析では、平均潜伏期間は3.6日（デルタ株3～5日）、平均発症間隔は3.1日（デルタ株2.9-6.3日）とデルタ株より短い。オミクロン株感染例の二次感染率は44.7%で、デルタ株の20%と比較して高い。 ・デンマークでは、785例のうち76%がワクチン接種完了（7%追加接種済）。1%が入院治療（うち1例は集中治療）、死亡例報告なし。 ・ノルウェーではパーティー参加者111人中80人が感染。うち、79人が有症状。入院例や死亡例の報告はなし。潜伏期間は中央値3日。 	

オミクロン株について（各研究結果等）

各種報道内容や会議資料に基づく

公表主体	公表内容
国立感染症研究所 (12/31)	<ul style="list-style-type: none"> ■ ワクチン・抗体医薬品の効果への影響や免疫からの逃避 ・ ファイザー社製のワクチンを 2 回接種後 2-9 週間ではオミクロン株に対する有効率はとデルタ株と同等。 ※オミクロン株：88%（95%信頼区間65.9-95.8） デルタ株：88.2 %（95%信頼区間86.7-89.5） 2回接種後 10 週以降では、デルタ株よりもオミクロン株に対する有効率が低下。 2回接種後 20 週以降においては、デルタ株に対する有効率が 60%強であるのに対し、オミクロン株に対する有効率は 35%程度。 ・ ファイザー社製のワクチン 2 回接種後 ファイザー社製ワクチンを3 回目接種後直後、発症予防効果が70%に上昇するものの、10週以降で45%に低下。 モデルナ社製ワクチンを 3 回目接種後、5～9 週間後には約70～75%の有効性が認められた（10週以降のデータなし）。 ・ アストラゼネカ社製のワクチン 2 回接種後 ファイザー社製もしくはモデルナ社製ワクチンを 3 回目接種後、2～4 週間後に約60%に上昇。 ファイザー社製では10週間後には35%、モデルナ社製では45%にまで低下。 ※ただし、観察研究であり、オミクロン株感染例が少ないため、点推定値の評価には注意が必要。 ※オミクロン株感染による重症例に対するワクチン有効性については更なる検討要。 ・ ロナプリーブは、オミクロン株の分離ウイルスに対して中和活性が著しく低下している可能性（試験管内での評価）。 ・ 再感染のリスクはデルタ株の5.41倍（95%信頼区間4.87-6.00）。 ワクチン接種なしでは6.36（95%信頼区間5.23-7.74） ベータ株やデルタ株の流行時に比較して、再感染の発生率は高まっている可能性。（英国健康安全保障庁（UKHSA）による報告） <ul style="list-style-type: none"> ■ 重症度 ・ 国内オミクロン株感染例109例の解析（厚生労働省） 無症状29例、軽症74例、中等症 I が 6 例。 ワクチン接種歴 未接種者22例、接種者86例、接種日不明 1 例。 ・ 救急外来受診・入院率はデルタ株と比較してオミクロン株感染で0.62倍（95%信頼区間0.55-0.69）。 入院率のみでは0.38倍（95%信頼区間0.30-0.50）（英国健康安全保障庁（UKHSA）による報告）

オミクロン株について（各研究結果等）

各種報道内容や会議資料に基づく

公表主体

公表内容

厚生労働省アドバイザリーボード
(1/6)

西浦教授資料より抜粋

- ・大阪府においてオミクロン株の割合が90%を超えるのは2022年1月15日(95%CI: 1月14日-1月16日)と予想。
- ・大阪府において1月15日のCOVID-19の伝播性はDelta株流行時から比べて2.61倍(95%CI: 2.59-2.63倍)になると考えられる。

■ 倍加時間、実効倍加時間の推定

()内は95%信頼区間

都道府県	利用可能データ	使用データ	倍加時間(日数) (すべて使用)	実効倍加時間(日数) (直近7日)	実効倍加時間(日数) (直近14日)
大阪府	2021/12/22- 2022/1/4	全てのケース	/	1.87 (1.75, 2.05)	2.56 (2.47, 2.67)
沖縄県	2021/12/22- 2022/1/4	全てのケース	/	1.35 (1.30, 1.40)	1.86 (1.80, 1.92)

大阪府、沖縄県ともに直近 7日間のデータを用いた倍加時間は 2 日未満。

オミクロン株について（各研究結果等）

公表主体	公表内容	各種報道内容や会議資料に基づく
英保健安全保障庁 (12/17)	<ul style="list-style-type: none"> ●再感染リスクは約3.3倍。 	
英保健安全保障庁 (12/23)	<ul style="list-style-type: none"> ●オミクロン株の感染者は従来のデルタ株に比べ、入院リスクが50～70%低い。救急外来にかかる可能性はデルタ株より31～45%低い。 ●ワクチンの3回目の接種による発症予防効果はオミクロン株に対して低下するスピードが速く、追加接種から10週間以降に15～25%低くなる。 ●家庭内の二次感染リスクはデルタ型の約1.3倍、家庭外は約2.7倍。 ●発症予防はファイザー製の2回目接種から2～4週間後で60%程度、15週間以上後で20%以下。 ●ファイザー製の3回接種直後で発症予防70%程度。 	
インペリアル・カレッジ・ロンドン (12/22)	<ul style="list-style-type: none"> ●デルタ株に比べ、オミクロン株感染者が病院にかかるリスクが15～20%低く、一晩以上の入院リスクは50-60%低い。ただし、既感染の影響を除いた入院率の低下は0-30%程度と推定。 ●ワクチン未接種のオミクロン株感染例は、未接種のデルタ株感染例の入院率の0.59倍（95%信頼区間0.5-0.69）。既感染の影響を除くと0.76倍となりデルタ株感染例との差が縮小。※事例が少ないなど解釈に注意要。 	
エディンバラ大学 (12月)	<ul style="list-style-type: none"> ●オミクロン株感染による入院リスクは、デルタ株より3分の2低下（ただし、調査対象の大半が20～30代であることに留意）。 	
南アフリカ国立伝染病研究所	<ul style="list-style-type: none"> ●オミクロン型で入院が必要になる割合は2%台で他の新型コロナ感染と比べて8割低く、重症化リスクはデルタ株より7割低い。 	